

名越の庵室

一

「精を出して……しっかり働かぬと、お前達はあの砂浜に寝そべっておる牛どもに負けてしまふぞ」

稲村ヶ崎を真向こうにみる飯島の浜辺である。材木の筏を引いてきた船が二・三隻岸について大賑いである。

子供がいる。大人がいる。旅姿の人達もこれに混じって見物している。その見物人を邪魔もの扱いにして人足達が岸辺から材木を運んでいるのだ。

建長三年十一月に工事を起した建長寺を、今年（建長五年）中には完成させようとして、普請場に運ぶ材木の積み込みである。

建長寺から差し向けられた、禅宗の坊主らしい筋骨の逞しい僧侶が人夫を叱りつけて督促して

いる。

「いいかなあ、昔或るところで寺を建てたんだ。寺が建った後で、誰が一番果報を得たかと云うと、驚くなかれ、人間様でなくて、材木を運んだ牛どもであったという話がある。牛は慾をはなれて黙々と尻を叩かれながら材木を運んでおる。

ところがどうじゃ、人間は皆欲のために働いて居る。ここが果報のある無しわかれめというところだ。お前達に慾をはなれて働けとは無理だろうからそこまでは注文せぬが、怠けずに、精だけ出して、まあ働いて貰いたい」

材木を運ぶために、連れてこられた数匹の牛が砂浜に寝そべって口を動かしている。その口辺の泡に五月の陽がちかちかと照り返されていた。騒がしい人の動きをよそにして、ねむたそうに一しきり牛がうなりたてた。

「みい……。畜生の牛どもにも拙僧の話が合点いったとみえて、返事をしておるではないか」
「坊さんだけに、説教にはそつがねえなあ」

人足どもは蔭口をききながら、牛車に材木を積むのに忙がしかった。

何処の遠い山から切り出したのか知らないが、一本の材木を運ぶために、牛が五、六匹も要るといふ程の大きな材木が去年あたりは、どしどし運ばれたものである。このために滑川にかけた橋が落ちたことさえあった。

音にきく支那杭州経山寺の模様を本朝に移そうとする、執権北条時頼の空想は、偏門、総門、山門、仏殿、法堂、方丈、鐘樓、禪堂、食堂、照堂、祖師堂、経藏、塔中は八か寺という鎌倉小袋坂の建長寺となつたのである。

「相州様（北条時頼）の御威光はたいしたものさ、去年は長谷の近くに大仏様をこしらえた。案内坊主のせりふじやないが、御丈は三丈三尺五寸、面の長さが八尺、眼の長さが四尺、お耳は六尺五寸、親指の周りが三尺余りで、口は三尺三寸、このほかでかい口で毎日飯を食われたんでは、鎌倉中の人間が乾し上つちまう」

「おいおい、後の方はお前のつけ足したろう。だが、それでも足らぬとみえて、今年の十一月迄には建長寺をでつち上げようというのだから豪勢なものさ」

「噂にきけば、その建長寺に座わる坊さまは、日本の坊主では光り方が足らないと見えて、あち
らの方から呼ぶという話だ」

「呼ぶどころか、もうとつくにお着きになつているよ。道隆大覚禅師、宋の国から来た本場もの
さ」

がやがやと騒ぎ立てながら建長寺の普請場へ材木を運ぶ人足達の囁き話である。

「俺達人足どもにとつちや、仕事にありついて食うにことかかぬから、相州様は仏様よりもつと有難いお方で、あんまり蔭口もきけないが、ここ数年來、飢饉だ、疫病だ、地震だ、大暴風雨だ

と、ひっきりなしに打ち続くご時勢に、どうしてこう寺ばかり建てるんだらう。年貢のとりたてで、諸国の百姓は青息吐息だ」

「苦しい時の神だのみというかんじや」

「俺の考えは違うよ。これは相州様が勘考されたものだと思う。なますが暴れるので近年地震がつづく、これは一つ大きな重しを鎌倉中の要所要所に置こうと考えたのだ。だから大仏さまの目方が二万五千貫だ。たいした重しだぞ。長谷の観音が三丈三尺でこれもちよつと重しになる。建長寺になると数でこいだ、丈六の地藏菩薩が一千体という大変なものだ。これでもなますの野郎も少しはおとなしくなろうじやないか」

建長寺御用と制札を立てた材木を積んで、延々と続く牛車、往還の諸人は路がせまいので、これが通りすぎるまで、田甫の中を歩くか立ち止って見送るより外に仕様がなない。人足どもは勝手なことをしゃべりながらこれらの立止っておる人々の顔を得意そうに見廻しておるのだった。

監督の目のとどかぬ最後の牛車に腰掛けていた人足が、車について歩いてくる人足に声をかけた。

「おやおや。あんなところから煙が上がつておるぞ、炭焼き小屋でもあるのかな」と名越の山麓を指さした。

「どれどれ、あそこか……ありや炭焼き小屋じやない。何処から来たか知らないが、近頃坊さまが住んでおるんだ。俺はあの辺には猿が出て来るというので、黒焼きでもこしらえようと思つて

何時だったか、弓を持ってあの辺をぶらついた。すんでのことで大きな奴を一匹ものにしようとしたら「おいおいわしの可愛い弟子達をいじめては困るなあ」と、六尺もあるうか大きな坊さまがいつの間にかそばに立っていたんでびっくりしたよ。

とどのつまりは猿の代りに俺の方がつかまって、粗茶一服進ぜようかとかなんと云われて、あそこに案内されたんだ。

こちとら建長寺の人足から見たら、乞食小屋同然のところのゆうゆうと座して、粗茶だといって進められた時には、ちよつと妙な気がしたよ。

同じ鎌倉の町中でもこうも違うものかなあ。坊さまといえば、金襴の法衣に包まれておる方達ばかりと思つたのに、破れた薄墨の衣一つ、座敷の中には経机に経文らしいものが飾つてあるほか、鐘もなければ木魚もない。夜はどうして寝ることやら、樹下石上とはいいいながら、人のことだが気もめた。

そうして暫くは、鎌倉の町中の出来市をいろいろと尋ねられたことがあつた。あんまり気安いので話の終りに坊さまあんたは、お寺はお持ちでないかと伺つたら、自分の身体をぽんと叩かれて、これがわしの寺じゃといわれたよ。頭の辺が本堂なら首から下が庫裡と方丈じゃといつて笑つたつけ。帰り道でお百姓に逢つたから、あれは何処の坊さまかと尋ねたら、何処からきたか知らないが、毎日のように彼処で南無妙法蓮華経と唱えている不思議な坊さまだといつたが、なあ

オイ、南無妙法蓮華經という唱えごとはあんまり聴いたことがねえなあ」

「南無妙法蓮華經か……南無……妙法蓮華經……こいつは俺も初耳だ」

「コラコラ！眼が届かぬと思つて車に腰掛けてる奴かおるか、勿体ない」
人足は警護の役人に叱られて、あわてて車から飛びおりた。

一一

今日も富士が見える。

ここ名越の庵室から見る富士は、虚空に浮かんだ富士である。無論箱根伊豆の連山は雲に隠れてみえない。真昼の月を見るような、雲の上に富士の頂きがぼうつと浮いてみえる。銀盤のような鎌倉の海、飛ぶ鳥の影さえ映るような気があるのである。

先刻から、裏山に野猿の叫び声が聞えておつたが少しは静かになった。

名越から半里程東南の久木の辺に、すみかのあるらしい野猿が、名越迄は本を伝わって遊びに来るが、名越で山がとぎれるので、ここまできると、またもとへ帰つて行くのであった。

野猿達は名越の庵室に一人の大きな坊様がいて、何事かを一生懸命に唱えておることを鎌倉の町の人達よりも早く知っていた。

動物の本能でこの人は自分達に危害を加えないと直感すると、あきれる程になつくものである。この野猿達は庵の主人である聖人の御題目の声を聞くのが日ならずして日課のようになってしまった。聖人が読経唱題中には、縁側のあたりまで近づくのさえあった。

この野猿達も帰ってしまった。建長五年十一月の初旬、静かな秋の日も暮れようとしている。この月の二十五日には建長寺の落慶式が予想されて、鎌倉の町には、当日の出入をあてこんでの、いろいろな噂話がいつぱいであった。

建長寺の落成、これによって禅宗は、一つの新しい勢力を鎌倉に加えることが出来るのである。源氏山の麓、寿福寺には悲願朗誉上人があつて禅宗を弘めておつたが、建長寺には遠く宋の国より道隆上人をよんで、その住職と仰ぐというのだから、建立主北条時頼殿の信仰の程も察せられる訳である。

この禅宗に対して念仏宗は、材木座に光明寺（鎌倉の大仏はこの寺の末寺広徳院にある。大仏の建立者は北条時頼）の然阿上人、新善光寺には、道教上人、長楽寺には隆観上人、ともに法然上人の法孫として、大いに浄土念仏宗を弘めて、禅宗が武士の階級に弘教をつとめれば、念仏は商人農民の一般階級に布教宣伝を試みていたのである。

これに対して真言宗は、依然たるころの勢力を握ぎつてゆらぐことがなかった。

鎌倉八幡宮の別当職には僧正隆弁上人、大蔵阿弥陀堂には加賀法印定清等があつて、病氣、出

産、災難、合戦ともなれば、真言秘密の祈禱師に依頼せざるを得ないのが当時の鎌倉の人心であった。

北条の天下となつて僅々三十年を出ずして、鎌倉は日本の中心となり、文化の中心となり、又活気の点においては仏教の東京都をもしのぐ、仏教の中心地鎌倉ともなつていたのである。

だが、これは表面のことであつた。

大仏様、長谷の観音様、建長寺、寿福寺、光明寺等々如何にも仏法は興隆したかにみえているが、考えて見れば、此等の寺々は時の為政者が、民の膏血をしぼつて建立した寺であり、都の体裁を整えるため、人心を安定させるため、自己の権力を誇示するため等々の故に建立された寺であつた。

庶民の信心が凝つて建立されたというような寺は一箇寺もなかつた。寺は為政者が建立すべきものであつたのである。故にこの寺に入る僧侶は、為政者にとりいらねば、生涯住職の地位に登ることは出来なかつたのも無理がない。

念仏の寺も禅宗の寺も真言の寺も律宗の寺も、その建立者は同一人であり、大檀那は一人であり、その為政者の一家一門であつた。だから、立派な寺におさまつた住職は、常に現状維持を願つていた。従つて念禅真言律と宗旨は異なつていても大檀那は同一人であるから互いに援助し合ひ、その寺を維持しようと務めていたのである。

真言の僧侶も禅宗の僧侶も念仏を唱える。

武士の精神修養には禅宗がよいが、病気災難出産等の御祈禱は真言宗が受けもつ、道路普請や橋をかける民生の方面は律宗が引き受ける、さて臨終となれば、念仏の僧侶が、いよいよ私の番が来ましたと引取るといった具合で、職場を守って万事が仲よく寺々の興行にいそしんでいたのである。

大寺に入れば妻妾を蓄えること、魚鳥を服することなど公然の秘密で、むしろ現代の人々が、知らな過ぎる程である。

このような状態であるから、僧侶は自分の宗門の研究すら、思いもよらぬ状態であった。

人の性質によって、人の好みによって、仏の教えは違うものである。その故に六万の法蔵という位に、沢山のお経があるのだ。いずれも仏説であつて、自分の好みによってどれを執つてもよろしいのであると僧侶が思っていたのである。

武士はいざ合戦ともなれば、何時如何なる所でも命を捨てなければならぬ。それには空だ空だと教えておけばよろしい。

商人百姓にはこの世の中は仮りの世の中である。お前達はこの世の中にお客さんで来たと思つてから腹がたつのだ。お客さんではないぞ。働け働け、そして後生安樂を願え、後生を願うことのみにお前達は、この世の中に生れて来たのである。

後生を願うにはどうしたらよいか、信心をしなさい。この世の中にお客さんできたのではないから、一生懸命働きなさい、そしてうんと功德をつみなさい。かくすれば後生安樂疑いなしと庶民には教えたのである。

全くここ三十年來、打ち続く大地震、大暴風雨、飢饉、疫病の中に生きておれば、この世は仮の世の中で、何処かに本当に住む世の中がおるような気がするのも無理はなかった。

この気持をよく擱んだのが念仏の教であった。法義とか仏の教とかが、いずれが真であるかなどとは鎌倉の寺々の僧侶は考えていなかった。強いていえば、流行するということ事実が真であった。流行しないものは、たとえ仏の教であっても真実ではないのだと考えていたのである。

人が変り世の中が変ればそれに相応して、仏の教えも変えてゆかねばならないと考えていた。

人の心を先きにしてそれに仏の教えが追隨してゆくのなら、それは仏の教えでは毛頭ない。むしろ仏の教えは、ゆがんだ人の心を正しくするもので、或る時には、時代に受け入れられないような姿さえとることがあることを鎌倉の寺々の僧侶は一向に知らなかった。これが聖人が名越の庵室の主人となつた当初の鎌倉の仏教界であつた。

訪ねる人もない聖人の庵室に今日は一人の僧が訪れて来た。

自身の口から、叡山から参つた成弁と申す僧侶であるといひながら笠をぬいだ。

南無妙法蓮華經

六尺余の長い白い布の上に書かれた題目、聖人が丹誠をこめて書かれた題目である。筆勢は正に竜虎相打つの気概がある。後世の人はこれを目蓮が発明した髭題目なぞというが、それは転宗転派を禁ぜられた徳川時代の気概のなくなつた日蓮宗派の僧侶の書いたお題目をみてから、そんな悪口をいいだしたのであろう。今ここに書かれた聖人のお題目はそんなものではない。

伸び伸びとした雄渾な筆法、南無妙法蓮華經こそ、宇宙法界、不変の哲理、万物を育成してやまぬ大光明、大慈悲の象徴であつた。そうしてその哲理は、不変に正しいものであつた。国が亡びようが、世の中が変ろうが、永遠に正しいものであつた。だがその正は、いつの世にでも、邪とともに存することを許さない。故に今静かに布にしみこんでゆく南無妙法蓮華經の文字は慈悲の象徴ではあるが、一度邪に対しては、断じてそれを破折して止まぬものである。さればこそ純白の布に書かれた伸び伸びとした七字の筆法は、一切の邪なるものを切断する長い剣の如き風格があつたのである。

書き終つた聖人は、側に墨をすつていた日昭を御覧になつて、にっこりと微笑せられた。日昭

とは過ぐる年の十一月、「叡山から参った成弁と申す僧でございます」と、この草庵を訪れた僧侶である。聖人よりは一歳の年長者であるが、叡山において当時の蓮長である聖人の法話を聞いて、深く聖人の法義に感服し、聖人が叡山を下りて一宗を開けば、必ず自分は第一の弟子として給仕奉公いたしたいと約束した人である。

叡山における権律師という僧位を潔よく返上して、今は名も聖人より日昭と賜わって、一所化として聖人に仕える身であった。

「あれなる旗竿に打ち樹てましょう」

「さよう……」

日昭の言葉に聖人は答えられた。

広いといえば名越の山全体が庭である。せまいといえば軒下より三尺程が庭であろう。

その庭に題目を書いた布が、青竹の旗竿によつてかかげられた。鎌倉の海を渡つてきた冷たい風が、名越の山肌に温められた空気にぶつかるせいであろう。題目の旗は急に生氣を得て踊り跳ねる、竜の如くに突如空にかけり始めるのであった。

お題目の長い筆法は旗のはためきに調和していた。題目は生きているのだ。

「日昭、あれが明日からの日蓮の姿だ」

「いざましろいどびいざいます」

師弟ともに庭の旗の自由奔放な動きを、草庵の中から、じつと眺めていた。

「明日からわしは鎌倉の街頭に立つ、あれなる旗が日蓮の唯一つの旗標じゃ」

「いよいよ法戦の時期が到来いたしましたか、お目出度うございます……この日昭も非力ながら共々お伴をして随力演説をいたしとう存じます」

「……そのことだが、実は申しにくいが日昭おん身には、これからずうつと留守を頼みたい」
「えっ」

日昭は驚きの声を放つと思わず庵室の中を見廻した。

「これこれ皮肉に部屋の中なぞ見廻さんでもよい。何一つないこの庵室の留守番と思われては困る」

聖人はこういつてから、静かに語調を改めて語り出した。

「仏の精神は法華経なり、これを知れる者は日本国に但日蓮一人である。この一言を申し出すならば、父母兄弟師匠に国主の王難必ず来たることは経文に明らかである。

さりとて仏道を求めてここに二十年、これを知つて黙せば慈悲なき者となり果てねばならぬ。

いおうかいうまいかこの二言、日頃月頃念じておつたが、法華経、涅槃経等によつてこのことを考えてみると、いわずば今生はことなかるうが後世は無間地獄疑いなし、いうならば三障四魔必ずきそい起るべしとあつた。わが身に難の来たることは敢て意とせぬが、国主の王難が大恩ある

両親師匠にまで及んだ時、日蓮の信念が退転するようならば言い出すことは思い止むべしとまで考えたのであるが、法華経の宝塔品に六難九易の譬がある。即ち我等程の小力の者が須彌山をなげるとも、我等程の無神通力の者がかれ草を負うて大火に焼けずとも、我等程の無智の者が何億巻の経々を読み覚えようとも、法華経は一句一偈末代には保ちがたしとあった。法華経は必ず末法の世の中に流布すべしとは仏の遺言である。

だが、これを弘むる者には大難必ず来たと仏は繰り返し、繰り返し戒められておる。生々流転の法界を観ずれば、我等三界に生を受けし骨は山と積まれよう。その間、妻や子のために流した涙は河と流れよう。だが未だ一滴の涙も法華経のために流さず、一骨と雖も未だ仏に捧げたことがない。日蓮今度強盛の菩提心を起こして退転せじと大願を立てたのである」

この言葉をきく日昭の顔には、感激の色がありありとあらわれてきた。

「そこで日昭おん身には後を頼むぞ。この日蓮は明日よりは流罪死罪の的となることを覚悟して、鎌倉の辻々に南無妙法蓮華経と唱えるのだ。石が飛び瓦が飛び、刀が杖が我が身に加えられることは経文に明らかである。

だがこの難が来れば、きたる程、法華経は必ず弘まって行く、これまた法華経に説くところである。さればおん身は宜しく内にあつて、やがてはわが弟子わが檀那となるべきものをひきいてわが法義を守らねえ。たとえ法華経の正義が弘まっても、その草創の間に、和党ども一族が

法敵によつて亡ぼされたのでは、弘教もその効果がない。

万が一日蓮が迫害によつて倒された時は、日昭おん身が始めて立つ時だ。その時までおん身は留守番じゃ、いいかな、日蓮が鎌倉の辻々に南無妙法蓮華経と唱えておる間は、おん身はいよいよ内にひそんで全くの影の人となつてわが後継者を養つて下され、決して日蓮と同罪となることのないよう大いに用心して貰わねばならない。

守るも攻めるもみな法華経のため、国のため、神のため、一切衆生のためである。いなおん身の守り堅ければこそ、この日蓮法華経の大利剣ひっさげあの題目を旗標として、法戦に後顧の患いなく打つて出ることが出来るのだ。鎌倉の覇者北条殿を背景として大伽藍を誇り錦欄の法衣を着て、我こそ仏弟子也と称する念禪真言の魔作沙門が東海の海人の子日蓮が敵手かと思えば、日昭、面白いではないか……」

